

久留米大学

御井図書館ニュース

No. 47 2001年9月1日発行

回り道 (detour)

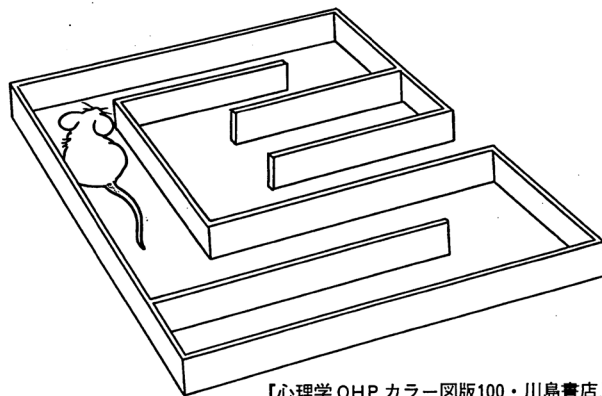
大学院心理学研究科科長 津田 彰

仕事柄、不登校の児童生徒を持つ親から教育相談を受けることが多い。不登校とひとくちに言っても、子どもにはさまざまなタイプが見られるし、子どもの心を支えるはずの親や家庭のあり方も異なる。その中で時折、内面的な洞察力が優れており、不登校中にも、歴史書や名作と称されている古典的な小説を読みふけり、自分の存在の意味について深く考える思春期の不登校生徒に出会うことがある。

親は決まったように最初は、「学校にも行かず、皆から遅れてしまい、人生の落伍者になってしまうことが心配だ」と嘆く。しかし経験豊かなスクールカウンセラーは、このような子ほど、初めは不登校状態に対して、強い罪悪感を抱き、苦しむが、不登校を通して内面的成長を遂げる子も多いことに気づいている。結果がすぐに求められ、短い時間軸の中で評価されるような現在の学校システムにあっては、彼らや彼女たちの行動は落ちこぼれ者の烙印を押されてしまうかもしれない。一見すると目標から遠ざかり、退却する行動だからだ。

しかし、目標に背を向ける行動が取れるのは、高度の思考が働かないと出来ない。前方と両脇をフェンスに囲まれた場所に空腹のニワトリを置く。ニワトリは目の前に餌があるのが見えるが、フェンスに阻まれて取れない。ニワトリはフェンスの前を右往左往するだけで後ろには決して行かない。後ろ向きに向かって歩き、フェンスを後ろから出て、前に回れば餌が食べられるのにだ。この回り道は簡単そうであるが、目標(餌)から自分が遠ざかる行動を取ることは、心理的に認知の再構成(つまり、洞察)を必要とする高度の思考レベルがないと出来ない。

潜在的学習の例もある。図に示されるように、どこにも餌はなく、ネズミはただうろついているように見える。しかし、迷路の中に置かれたネズミは、たとえ餌がなくても、迷路についての学習は行っている。迷路を歩くことにより、迷路の認知地図が形成されているのである。そこでゴールに餌が置かれたとき、この認知地図によって、素早く行動する。外から見てネズミは特定の行動を学習しているようには見えない。しかし、実際には潜在的に合目的な学習を進行させているのである。



【心理学 OHP カラー図版100・川島書店】

経済効率優先で、すぐに望ましい結果が求められ、回り道をしたり、挫折、停滞することが肯定的になかなか認められない時代にあって、もう一度、回り道や挫折、停滞が必ずしも失敗や敗北を意味するものでないと、私達は認知的に再構成する必要があるのかもしれない。「この世に生まれてきたからには、何かやるべきことがあるはず、でも自分は何をしたらいいか分からない」と悩んでいる諸君。「大学に自分の心の居場所がない」と訴える諸君。時には、人間の英知が凝集されている図書館という空間に足を運び、癒されてはいかがだろうか。のんびりと落ち着いて自分の能力や希望を吟味し、自己の存在証明が明確化できるような、人生の糧が得られるかもしれない。

「図書館のとりこ」

文学部国際文化学科4年 山 浦 靖 大

私はよく、図書館で勉強する。なぜなら、家ではなかなか勉強が手につかない、いや、まったく手につかないからである。これは、まぎれもなく事実である。

しかし、図書館で勉強する理由は、それだけではないように思う。

では、どうしてなのか？ 自分でもよく分からないのでちょっと考えてみたいと思う。

はじめに、本の匂い。これは、本が数冊あるだけでは匂わない。新しくても匂わない。たくさんの古い本があって初めて、私の好きな匂いになるのである。その匂いのなかで勉強するのがいいのである。

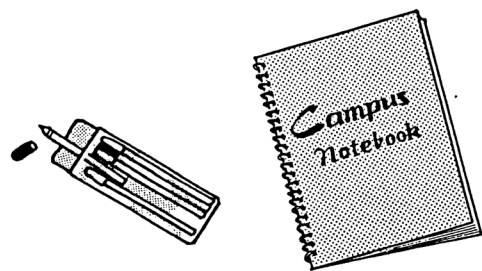
次にロマンス。漫画『耳をすませば』のような素敵な出会いがあればいいが、現実はなかなかそうはいかない。しかし、出会いはある。実際私は、幾人かの人と図書館がらみで知り合っている。もちろん、本が好きで、知的で、私に本を紹介してくれて、いろいろな影響を与えてくれるような人である。いい本をあまり知らない私にとっては図書館様々である。

次に、本との出会いがある。例えば、レポートの課題が出て参考文献を探すために本棚の本のタイトルを見ていく。すると、なぜかはわからないが目にとまる本がある。パラパラと中身を見る。いい感じだと、鞆は重くなるがついでにその本を借りる。といった具合である。

最後に、暇つぶしができること。暇つぶしというか、勉強の合間の休憩でもいい。何となく本を見て歩く。これがなかなか面白い。どこかで聞いたことのある本を見ついたり、先程の本との出会いがあったりする。おかしい題名の本もたくさんある。手にとって、それらを見てみる。これは相当に面白い暇つぶしである。面白いのだが難点があって、そんな本を見つけると、読むのにはまってしまい、レポートを書いている時などは、時間をロスしてしまうことがよくある。この点には、これから図書館を利用しようとする方は気をつけられた方がいいと思う。

私が図書館に行きたくなる理由は、今まで書いたことに尽きる訳ではない。言葉に表わせない何かが図書館という空間にはある。

結局私は、「図書館のとりこ」なのである。



「図書館実習」を終えて

経済学部経済学科4年 下野 扇 季

小学校の頃、図書館は私にとって心落ち着く場所でした。たくさんの本があって、ページを一枚めくるだけで現実とは全く違う世界に飛び立つことが出来るからです。図書館で私は何度も夢の世界を漂いました。そして、常にその世界を提供してくれたのは図書館の先生でした。

そういった経験から私はいつしか図書館司書に憧れるようになっていきました。司書の資格を取得することができるというのも大学に入ったひとつの理由に挙げられると思います。そうして、当然のように司書課程を選択した私でしたが、授業内容は想像をはるかに超えて難しいものでした。はっきり言って授業を受けている段階では自分が何のために何をしているのか理解することが出来ませんでした。自分に司書の仕事は向いていないのではないかと落ち込んだりもしました。しかし、図書館司書への憧れは無くならず、思いきって実習を受けてみようと思いました。図書館内部というのは、利用者側から見れば未知なる世界で、私は「何をさせられるのだろう」という不安と「憧れの図書館員を体験できる」という興味でいっぱいでした。

実習一日目は、非常に時間が過ぎるのが遅く感じられました。ですが、一週間が過ぎてみればあっという間の出来事でした。午前中はコンピューター画面に向かい、午後は肉体労働というサイクルが一週間続きました。コンピューター操作においては、図書館員の仕事を大きくサポートしていて、しかも的確なので非常に感心してしまいました。午後の業務においては、人間の力の重要性を深く感じました。配架作業は、かなりの体力勝負と根性勝負だと思うし、無くなった本を探す追跡調査は本を探しながら利用者に腹が立つと共に、自分も取り出した本を別の場所になおした記憶が浮かんだりと自分の利用者としての立場を恥じると共に見直すいいきっかけとなりました。そして、何よりも授業で習ったことを実際目の当たりにすることで真に理解することができ、授業内容が役立つと感じた瞬間にはのかな感動さえ感じてしまいました。

今回の図書館実習を通して図書館の見方が大きく変わり、図書館の利用者全員が実習を受けた方がいいのではないかとさえ思ってしまった。御井図書館の職員の方々にはよくして頂き、非常に感謝致しております。そればかりではなく、私達利用者に最善の状態で本を貸し出してくださることに深く感謝致します。ありがとうございました。



「図書館実習」を終えて

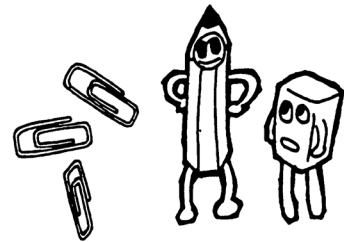
法学部法律学科4年 岸 森 裕 子

今回、図書館実習をさせていただいてはじめて、普通に利用しているだけではわからない図書館の一面を知ることができました。

これまでは図書館の仕事は本の貸出・返却、本棚の整理くらいしか思い浮かばなかったのですが、実際に経験してみて、本当に様々な仕事があるとわかりました。司書は椅子に座って利用者が来るのを待っていていればいいようなイメージがありますが、現実にはやることはたくさんあり、力仕事も多かったです。私は大学図書館で実習をしましたが、他の図書館で実習を行った人は一日中肉体労働だったと聞きました。

短い実習の期間では図書館の仕事の一部しか経験できなかったと思いますが、しかしそれでも十分貴重な体験をしたと思います。

実習は必修ではなく、やらなくても司書の資格は取得できますが、図書館の仕事をしてはじめて今まで授業で習ったことの意味が理解できますし、そもそもこんな経験はなかなかできないので、ぜひ実習をすることをお勧めします。



お知らせ

現在図書館では、図書館システムへのデータの遡及入力のため、雑誌にバーコードを貼付しています。つきましては借用中の雑誌がございましたら、大至急返却をお願いいたします。赤い背ラベルが雑誌です。速やかな業務遂行のためご協力をお願いいたします。

『知の玉手箱』（御井図書館発行・推薦本小冊子）の原稿を募集しています。1000字以内でお薦めしたい本を紹介して下さい。12月末日締切りです。



寄 贈 図 書 (学内関係者)

2001/05/01～2001/08/31受入分

寄 贈 者 名	著 者	タ イ ト ル	出 版 社
梅 崎 進 哉	梅崎 進哉	刑法における因果論と侵害原理	成文堂
大久保 雅 行	木原 範恭	Key word & key sentence	「原点」人文・社会科学研究会
大久保 雅 行	大久保雅行	宗教の科学と実践：宗教的新文化創出理論序説	葦書房
大久保 雅 行	大久保雅行	宗教社会学講義：共生概念の起源に関する研究	大久保雅行
大久保 雅 行	大久保雅行	宗教人類学入門：新宗教における文化変容の研究	大久保雅行
大矢野 栄 次	大矢野栄次	ケインズ経済学の可能性：複雑系をヒントに	九州大学出版会
久留米大学経済学部	松尾 匡	近代の復権：マルクスの近代観から見た現代資本主義とアソシエーション	晃洋書房
久留米大学公開講座委員会	由井 敏範	ビジネスの諸相：20世紀から21世紀へ	九州大学出版会
崎 村 弘 文	工藤真由美、木部 暢子	「方言のアスペクト・テンズ・ムード体系変化の総合的研究」	工藤真由美
櫻 井 浩	金 恩喜、桜井 浩ほか	韓国型資本主義の解明：伝統文化と経済	九州大学出版会
図 子 善 信	図子 善信	税法概論	大蔵財務協会税のしるべ総局
図 子 善 信	金子 宏ほか	租税判例百選	有斐閣
多 賀 太	多賀 太	男性のジェンダー形成：「男らしさ」の揺らぎのなかで	東洋館出版社
遠 山 潤	出水郷土誌編集委員会	今般出軍中日誌	出水市
中川原 徳 仁	Helmolt, Hans F.	Der Weltkrieg in Bildern und Dokumenten nebst einem Kriegstagebuch	J.M. Meulenhoff
中川原 徳 仁	瀬名 秀明	パラサイト・イヴ	角川書店
仁 木 恒 夫	スモン損害賠償研究会	スモンと損害賠償	勁草書房
仁 木 恒 夫	Haft, Fritjof 著、服部高宏訳	レトリック流交渉術：法律家の「構造的思考」を手本に	木鐸社
仁 木 恒 夫	松倉 豊治	医学と法律の間	判例タイムズ社
仁 木 恒 夫	新堂 幸司	演習民事訴訟法	有斐閣
仁 木 恒 夫	前田 庸	会社法入門	有斐閣
仁 木 恒 夫	松田 二郎	株式会社の基礎理論：株式関係を中心として	岩波書店
仁 木 恒 夫	龍田 節	企業法入門	悠々社
仁 木 恒 夫	滝川 春雄	刑罰と保安処分の限界：刑法における一元主義と二元主義	有斐閣
仁 木 恒 夫	莊子 邦雄	刑罰の理論と現実	岩波書店
仁 木 恒 夫	大塚 仁	刑法における新・旧両派の理論	日本評論社
仁 木 恒 夫	前田 雅英	刑法総論講義	東京大学出版会
仁 木 恒 夫	潮見 佳男	契約責任の体系	有斐閣
仁 木 恒 夫	中田 裕康	継続的売買の解消	有斐閣
仁 木 恒 夫	長谷部恭男	憲法	新世社/サイエンス社（発売）
仁 木 恒 夫	浦部 法穂	憲法	勁草書房
仁 木 恒 夫	内野 正幸	憲法解釈の論点	日本評論社
仁 木 恒 夫	浅香 吉幹	現代アメリカの司法	東京大学出版会
仁 木 恒 夫	太田 武男、明山 和夫	現代家族法の課題と展望：太田武男先生還暦記念	有斐閣
仁 木 恒 夫	宮島 喬、Touraine, Alain	現代国家と地域闘争：フランスとオクシタニー	新泉社
仁 木 恒 夫	前田 雅英	現代社会と実質的犯罪論	東京大学出版会
仁 木 恒 夫	菅野 和夫	雇用社会の法	有斐閣
仁 木 恒 夫	山田 録一	国際私法	有斐閣
仁 木 恒 夫	山本 草二	国際法	有斐閣
仁 木 恒 夫	潮見 佳男	債権総論	信山社出版/大学図書（発売）
仁 木 恒 夫	木内 宜彦、永井 和之	商法	勁草書房
仁 木 恒 夫	澤登 俊雄	新・刑事政策	日本評論社
仁 木 恒 夫	経済企画庁国民生活局消費者行政第一課	製造物責任法の論点	商事法務研究会
仁 木 恒 夫	Eser, Albin 著、上田健二ほか訳	先端医療と刑法	成文堂
仁 木 恒 夫	高橋 滋	先端技術の行政法理	岩波書店
仁 木 恒 夫	大橋 洋一	対話型行政法学の創造	弘文堂
仁 木 恒 夫	平野 龍一	犯罪者処遇法の諸問題	有斐閣
仁 木 恒 夫	宮沢 浩一ほか	犯罪被害者の研究	成文堂
仁 木 恒 夫	川出 敏裕	別件逮捕・勾留の研究	東京大学出版会
仁 木 恒 夫	棚瀬 孝雄	法の言説分析	ミネルヴァ書房
仁 木 恒 夫	Haft, Fritjof 著、植松秀雄訳	法律家のレトリック	木鐸社
仁 木 恒 夫	藤原 弘道	民事裁判と証明	有信堂高文社
仁 木 恒 夫	納谷 廣美	民事訴訟法	勁草書房
仁 木 恒 夫	利谷 信義	離婚の法社会学：欧米と日本	東京大学出版会
妙 木 浩 之	妙木 浩之	こころと経済	産業図書
妙 木 浩 之	妙木 浩之	好きできらいで好き。：心理経済学講座	日本放送出版協会
妙 木 浩 之	小此木啓吾、妙木 浩之	精神分析の現在	至文堂

※ 敬称略50音順

図書館利用状況（2001年度）

区分	月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	合 計
開 館 日 数		27	28	30	30	30	145
入 館 者 数	前年同期比	1,418	2,199	210	2,517	352	6,696
	学 内 者	17,807	25,338	25,382	41,139	10,469	120,135
	前年同期比	-7	18	-27	-20	-84	-120
	学 外 者	81	103	88	95	82	449
地 域 住 民 登 録 者 数	前年同期比	-11	9	-11	6	-3	-10
		31	20	13	20	14	98
貸 出 冊 数 (学 生)	前年同期比	190	411	167	-29	23	762
	全 体	1,128	2,443	2,439	5,162	1,077	12,249
	前年同期比	0	77	6	-24	6	65
	内、夜 間	216	486	545	959	34	2,240
	前年同期比	19	33	58	-71	18	57
	内、土・日曜	65	157	166	451	121	960
貸 出 冊 数 (教 職 員)	前年同期比	80	-55	20	14	20	79
	全 体	301	183	216	277	180	1,157
	前年同期比	56	-20	11	-33	-9	5
	内、夜 間	104	57	66	67	3	297
	前年同期比	-23	2	-11	-26	-2	-60
	内、土・日曜	5	6	5	34	13	63
貸 出 冊 数 (その他学外者)	前年同期比	1	23	6	-10	-28	-8
	全 体	51	92	84	16	77	320
	前年同期比	5	23	-9	3	3	25
	内、夜 間	10	36	24	8	5	83
	前年同期比	-24	17	3	-15	-14	-33
	内、土・日曜	5	38	36	0	29	108
A Vライブラリー 利 用 件 数	前年同期比	-17	-5	-5	1	-3	-29
	学 生	7	11	8	8	2	36
	前年同期比	-1	25	-4	1	0	21
	教 職 員	4	28	7	3	0	42
	前年同期比	0	0	-10	0	-2	-12
	その他学外者	0	0	0	0	0	0
相 互 利 用 (文 献 複 写) 申 込 件 数	前年同期比	-15	25	-37	14	36	23
	学 生	11	83	28	55	68	245
	前年同期比	2	28	-2	7	17	52
	教 職 員	37	34	9	21	64	165
	前年同期比	1	1	0	0	0	2
	その他学外者	1	1	0	0	0	2
相 互 利 用 (現 物 貸 借) 申 込 件 数	前年同期比	-1	-3	-7	6	0	-5
	学 生	3	10	2	6	6	27
	前年同期比	6	9	1	-1	1	16
	教 職 員	7	12	6	3	15	43
	前年同期比	0	0	-3	0	0	-3
	その他学外者	0	0	0	0	0	0

〈貸出冊数についての注記〉

1. 教職員の貸出には、専任教員の研究室貸出分を含まない。
2. “夜間”とは、17：00～20：00の夜間開館時間を指す。
*なお、4月1日～4月11日、8月1日～8月30日の期間は夜間開館を行っていない。
3. 地域住民への貸出は、7月4日～7月31日、1月4日～1月31日の期間は停止している。

編集・発行 久留米大学御井図書館
〒839-8502 久留米市御井町1635
TEL (0942) 44-4015
FAX (0942) 43-0348
<http://lib.mii.kurume-u.ac.jp/>